日本G.A.P ニューズレター

1 9 6 3

1月・2月

―― 円盤と宇宙哲学の研究誌 ――

日本ＧＡＰニューズレター　1963－1月2月号

目　次

クリスマスのメッセージ …… Ｇ・アダムスキ　1
人人はなぜ恐れるのか …… Ｃ・Ａ・ハニー　1
現代の宗教の起源 …… Ｃ・Ａ・ハニー　3
自然力の活用 …… Ｔ　生　7
科学トピックス …… 9
マリナー２号は報告した …… 11
金星文字は解読された？ …… 12
質疑応答 …… Ｃ・Ａ・ハニー　13
細胞から細胞へ伝わる印象 …… ロイ・ラッセル　14
“テレパシー”邦訳版の刊行について …… 17
ＧＡＰとは …… 19
核実験は中止されねばならない …… Ｇ・アダムスキ　21
編集後記 …… 25

クリスマスのメッセージ

G・アダムスキー

今年またこの時期にわれわれは一九六二回目のキリストの誕生を祝います。しかし私は今度のクリスマスも、あのキリストなる幼児を銀や黄金とひきかえに勘定台の上で売っていた過去となんら異なるものではないだろうと思います。あの〝謙虚な誕生〟を各人の心のなかに起こさしめるほどに人間のだれもが謙虚になるのはいつのことでしょう。しかし人間が謙虚になることこそキリストが生まれてきた目的を遂行することになると思います。どうぞ地上に平和がもたらされて、皮膚の色のいかんにかかわらず、万人に親切さがゆきわたりますように。

キリストという意味を昔の人人の日常生活の土台にしようとして、当時の指導者がやったように、クリスマスの日にいったいどれだけの人が貧しいカイバおけの前に立ってみることでしょう。多くの人は言葉でいうことはやさしいが、実行するのはむつかしいというかもしれません。しかし戦争をするための努力、不愉快な物事、自己満足などのためになされる決心が、カイバおけの前に立ってみようという努力のためにおきかえられるならば、やがて地上には天国が出現するでしょう。

新しい年の始めには多くの人が決心をしますけれども、それはめったに長続きしません。なぜでしょうか。それはこうした決心が人為的なわざとらしいものであって、しっかりと植えつけられていないからです。根づよく植えつけられている人は人為的な支えを必要としません。その人はいかなる逆境にも耐えるほどに強いからです。岩の上に建てられている家はいかなる嵐にも耐えますが、くずれやすい砂の上の家はこわれがちです。

そこで来たる六三年こそは私たちを一体化されたヒューマニティーという岩の上に築こうではありませんか。そうすれば弱い建築のつっかい棒にすぎない〝へつらい〟や〝おせじ〟を求めて生きる必要はありません。その場所には疑惑や恐怖のかわりに信念と信頼をおこうではありませんか。そうすれば私たちは自己の内外にたえず新しさを見ることになるでしょう。

人々はなぜ恐れるのか

C・A・ハニー

先般の私のニューズレターのなかに大きな誤りがありました。（注。ハニー氏発行のコズミック・サイエンス・ニューズレター一九六二年十月号。本誌昭和三十七年十一月ー十二月号）「質疑応答」の第四番目のなかに私が書いた次のような記事がありますが、これは読者の誤解の原因になったかもしれません。原稿をリ

コピーする際に重要な句が脱落したのです。

「あるブラザーズやアダムスキ氏はこのことを実証することができます。彼らも自我にとらわれると地球上の大多数の人間と同じ程度になるのです」

これを次のように訂正します。

「長年月をこの地球上ですごして地球人のあいだで生活してきたあるブラザーズといえども、自我にとらわれると地球上の大多数の人間と同じ程度になるのであって、アダムスキ氏はこのことを実証することができます」（翻訳するときにどうも変だと思いました。編者）

宇宙船で地球へ来る人人や、何らかの理由で地球人のなかにまじって住んでいる人たちの殆どすべてを、われわれが正しい知識を求めるのに信頼して差し支えはないことを一応確言しておきましょう。彼らはある活動に従事するために宇宙の法則のもとに生きているのですが、長いあいだ地球ですごして地球式の生き方に洗脳されてしまった人人によってこの活動が結果的には悪用される事もあります。真実のブラザーズは、宇宙に関する知識の源泉がすべて切り離されたまま、この地球上で孤立する危険を賭しています。

多数のブラザーズはとにかく地球で生活することを選んだのですから、その場合、彼らは自分たちを派遣した人人とつながりを絶たれるかもしれず、また彼らの情報源は得られなくなるかもしれません。そうなると彼らはもはや宇宙人の代表ではないということになり、真実のブラザーズの方針とは無縁な存在になってしまいます。

ところで、私は次の点を強調しておきます。世界で発行されるあらゆる種類のニューズレターのなかに（注。各国ＧＡＰの出しているニューズレター類を意味するものと思われます）、私でなく（注。ハニー氏でなく）他人の書いた記事のすべてが必ずしも私からその内容の保証を受けているわけではありません。同様に私の記事も必ずしも他人の保証を受けているとはいえません。私は他人の書いた記事にたいして責任を負わされることを望みませんし、私の記事にたいして他人が責任を負うことも望みません。

疑惑から生じた一種の狂気がわが国にひろがっています。これはついにはわれわれの破壊をもたらすかもしれません。この疑惑があらゆる事実を否定して真実ならざるものに頑固に執着するために、大きな問題が存在しています。

オハイオ州シンシナティーのＰ・Ｓ氏は次のようにいってきました。「あなたの発送名簿から私の名を削除して、今後は機関誌を送らないようにして下さい」これが手紙の全文です。自分自身の信念に反する考え方のすべてにたいして心を閉じさせるものはいったい何でしょうか。オープン・マインドをもって読むかわりに、彼は読むことをまるで恐れているのです。この理由は次のうちのいずれか一方であろうと思われます。すなわち、私のニューズレターに最近連載を始めた宗教の起源に関する記事がもとで、本人は牧師からニューズレターを読むことを禁じられたか、または真実に直面したり新しい考え方を受け入れることが不可能な本人が既成概念に反する事をとなえたりする事実のすべてを投げ捨てているからです。

私は誰にたいしても盲目的に信じなさいといっているのではあ

りません。大低の人は書物や記事を読んで、あらゆる見地からそれらを検討できるほどに知性がある筈です。自分の信念に反する文献を読むのがわるいと考える人はいないでしょう。調べようともしないで人間はいったいどうして向上することができるでしょうか。例の宗教の起源に関する記事を信じようとしない人たちがいます。明らかに彼らは私がでっちあげて書いていると思っているにちがいありません。なぜ人間は事実に直面することを恐れたり、物事がどんなふうにして発生したのかを調べたりするのを恐れなければならないのでしょうか。人人が自分の流儀で信じたり迷信や伝説を信じて知恵のないことをしたりする理由についてその真相を知るのは喜ぶべきことである筈です。

〝死海の巻物〟の多くはヨーロッパで刊行されましたが、米国では発売が禁止されました。（注。一九四七年の春から断続的に死海の西岸クムラン廃虚付近の洞穴から発見されて、学者の注視を浴びつつある古文書。大部分は羊皮紙に書かれた前二世紀から前一世紀までのヘブライ語聖書の写本、およびそれらの写本を所有していたユダヤ教徒の契約教団と呼ばれる一派の文書で、〝イザヤ書〟、〝ハバクク書注解〟、〝賛美の詩篇〟、〝光の子と闇の子の戦いの書〟、〝教団戒律提要〟などがそのおもなもの）いずれ本誌の連載記事で論争の余地のないこの重要な文書を掲載する予定です。このために旧約聖書の内容の殆どすべての訂正を要することになり、また新約聖書の教義をかなり書き改める必要がおこるでしょう。奇妙なことに――べつに奇妙でもないのですが――この新発見の古文書の内容は宇宙人の哲学を他に類のないほどに大きく裏書きしています。

現代の宗教の起源

〔2〕

第二部

セミラミス――女神なる母とその子

C・A・ハニー

前号の記事、すなわちこのシリーズの〝序〟と〝第一部〟においてわれわれは、キリスト教から出たものだと教会が称している現代の教えはキリストよりも二千年以上もの昔にあった教えと同じものであるかまたはきわめてよく似ているものであることがわかりました。そしてその起源を追求して、それらの教えが古代バビロニアあたりで起ったのであることを知りました。（バビロニアはアッシリア人の土地とも呼ばれています）

世界最初の偉大な指導者の一人であるニムロッドは古代人の太陽とヘビの神の崇拝に基づいた大文明を築きました。そして彼と彼の妻セミラミスはこの神の象徴とみなされ、多くの人によって生ける神そのものとも考えられました。非業な死をとげた後にニムロッドは神とあがめられ、セミラミスの子として生まれかわって来るといわれました。

セミラミス女王は自分と自分の子と死んだ夫とを神と称し、各種の尊称、儀式、像などをひろめ始めました。〝神の子〟といわれた女王の幼い子にまつわる種種の奇蹟に関する物語が人人のあいだに流布されました。人人はこの幼児（ニムロッドの生まれか

わりと称された子）を人間の肉体を借りた神の化身と考えたのです。ー〃父〃（ニムロッド）は幼児（ニムロッドの再現）として生まれかわったと思われたために、主役はセミラミス（聖なる神の母と呼ばれた）とその子（神の子と呼ばれた）ニヌスすなわちニムロッドでした。

◇　◇　◇

バビロンから発したこの〃母子礼拝思想〃は地上のすみずみにひろがりました。エジプトではこの母子がイシスとオシリス（幼児のオシリスは通常ホルスと呼ばれました）として崇拝されました。インドではこれがイシ及びイスワラとなり、アジアではシベレとデオイウス、ローマではフォルテュマと子供のジュピター、ギリシアでは腕に赤ん坊を抱いた偉大なる母ケレス、または腕にプルートゥスをかかえた平和の女神アイリーンとして崇拝されています。

セミラミスの領地では彼女は偉大な女神なる母レアとして礼拝されました。しかし彼女が自己の最大の栄光と名誉を獲得したのは自分の子供のためでした。子供を理由として彼女は自分の神聖さを主張したのです。多くの古代国家はこの子をタムズまたはバッカス（悲しまれる者を意味する）と呼んでいました。

学者がバビロニアの遺蹟を発掘したとき、初期の発見においてきわめて奇妙な事が判明しました。ニヌスすなわちニムロッドはしばしばセミラミスの子と呼ばれており、またあるときは彼女の夫と呼ばれているのです。このことは学者を困惑させましたが、これはセミラミスがその子は実際には〃神の子〃として生まれかわってきたかつての夫であると称した事実に学者が気づかなかったためです。さらに多数の発見がなされてずっと後にやっと詳細が判明したのです。

これと似たような話が他の国国にもあります。インドではイスワラがときにイシの子であるといわれ、ときには夫であるともいわれていました。今日の学者のなかにはさまざまの国の宗教的な神話に出てくるこの〃一人二役〃にまだ気づいていない人があります。子供がニムロッドの生まれかわりと考えられたのですから答えは容易に明らかになってきます。

図二は現代のインドに見られる母子像であり、図三はバビロニアの遺跡で発見された母子像で、図四はインドの別な母子像を示しています。（注。図は省略します）

この聖母子の崇拝思想はキリスト教の勃興まで世界中に続きました。この思想（教え）が現代の教会がむかし始まった頃に浸透するにつれてただ名前が変えられたのです。当時彼女は〃聖母マリア〃または〃処女マリア〃と呼ばれましたが、これは全くセミラミスが〃処女、神なる母〃と呼ばれたのと同じで、子供も同じように礼拝されていますし、昔通りの同じ姿をしていて、同じような儀式が行なわれました。実際には何も変わってはいないのです。古代バビロニアの教義を見事にまねた献辞がリスボンのある教会に刻まれていました。「ロレットなる処女の神に、その神性に忠実なるイタリア民族、この寺院を奉納す」

古代の宗教に見いだされる別な類似物に神神や女神の頭の周囲の光の輪があります。第五図はポンペイから出てきた絵画ですがこれはキルケの頭のまわりの後光を示しています。このような光

輪は古代の指導者すべてがその神性を意味するために用いたもので、他の多くの迷信や慣習と同様に今日の各宗教に伝承されました。

古代の大神殿においては指導者たちの神性さをたたえるために合唱隊が賛美歌をうたいました。第六図はその賛美歌を記したクサビ文字の翻訳の一部です。（注。イシュタールにたいする祈りの歌が数行掲載されており、これはバビロニアの最もすぐれた宗教歌の一つと考えられているということです）これはバビロニアの母なる女神イシュタール（セミラミス）をたたえた聖歌です。今日と同様に当時もオヤジの神は見落とされていました。これは目に見えない存在で容易に認められない神であったからで、また地上の出来事に殆ど関係がなかったからです。そのかわりに母と子が尊敬と崇拝の対象にされました。子供は母親の世話になっているものとして語られています。しかし必ずしもそうだったわけではありません。ですから〝三位一体〟という神の概念があったことも古代バビロニアに発見されています。この概念をあらわす絵が次にあります。先ず老人として描かれた〝父〟の頭が上方にあり、次にバビロニアの言語で〝子〟すなわち〝救世主〟を意味する輪がその下にあって、その左右にハトの翼と尾がついています（これは聖霊をあらわします）。セミラミスはこの〝聖霊〟が彼女の体内に宿って神の子が化身して出てきたのだと称したのです（図七）。

この〝三位一体〟の教義は今日見られるような正三角形によって象徴化されました（レイヤード著〝バビロンとニネヴァ〟六〇五頁）。マドリーの教会のなかには一つの体に三つの頭のある三位一体身の像を安置しているのもあります（パーカースト編〝ヘブライ語辞典〟より）。今日の三位一体の教義はキリストよりも二千年以前にバビロニアで最初に教えられた教義と一致しているのです。

ところで、地獄とか煉獄とかに関する概念はどこで起ったのでしょうか。そんなものが実際にあるとすれば、なぜキリストと、その弟子たちはそれを説かなかったのでしょう。答えはきわめて簡単です。それはバール神（すなわち太陽神たるニムロッド）の基本的な教義の一部であったからです。

バール神を崇拝した帝国のパーガモが初期のローマ帝国の一部になったとき、その概念が教会へ入って行きました。パーガモはバビロニア人から地獄説を受けついだのです。

バビロニア人にとっての煉獄は、死者の魂がさほどひどくない罪を洗い流す場所でした。これは煉獄の神プルートーによってなされました。このプルートーこそあの世の人間の運命を主として左右する神だったのです。死後の魂を浄化するのはプルートーの役目だといわれていました。

図八はバビロニアから発掘された絵で、三位一体神を示しています。図九はシベリアで見られる像で、同じく三位一体神を描いたものです。

第三部　四旬節と復活祭の起こり

約千六百年間、人間はキリストが日曜日の朝に死からよみがえ

ったと教えられてきました。またわれわれは〝復活祭〟とはキリストの〝よみがえり〟を意味するものと教えられています。しかしこの両方とも誤っています。〝イースター（復活祭）〟という名前はバビロニアの女神イシュタール（すなわちセミラミス）の英語なまりです。

バビロニア人はイシュタールと同じように、彼らの春の女神をアスタルテと呼びました。この両方が英語で〝イースター〟と呼ばれるようになったのです。毎年の春になるとイシュタール（又はアスタルテ）の誕生を祝って祭典がもよおされました。そして各国でもその太陽の女神の誕生を祝って同じ祭典がもよおされたのです。各国とも同じ礼拝式をやりました。エジプトではこの女神がイシスという名で祭られていますし、インドではイシ、アジアではシベレというふうになっています。

この国国ではこんにちの復活祭にあたる行事に先立って、四十日の期間をもった四旬節が行なわれました。かかる四十日の四旬節は一年の春季に行われたのですが、今もなおクルド人（注。トルコ南東部、イラン北西部、イラク北部にわたる一帯の高地に住む住民）の悪魔崇拝者によって保たれています。このクルド人は偶然にも彼らの古代の主人であったバビロニア人からそれを受けついだのです。（レイヤード著〝バビロンとニネヴァ〟より）。こうした四十日の四旬節はまた〝異教徒〟のメキシコ人によって春に行われました。このことはフンボルトの〝メキシコ研究〟第一巻に述べてあります。

ウィルキンスン著〝古代エジプト〟の第一巻に、このような四旬節はエジプトでも四十日間祝われたという記事があります。この盛大な国際的な四旬節は太陽の女神の誕生と太陽神タムズのよみがえりを記念して毎年行われた祝福の行事に先立つものでした。しかし実際に四旬節が行われる時期はまちまちでした。パレスタインとアッシリアは六月に、エジプトは五月に、英国は四月にといったぐあいです。

四旬節が教会へとり入れられたのは西暦五一九年ごろです。同じごろにアウレリアで開かれた会議で教会が四旬節も復活祭の前に厳しゅくに行われねばならないと布告しました。

三、四世紀には現在復活祭として知られている祭礼はこんにちのそれとはかなり異なったものでした。当時その祭りは、〝すぎこしの祝い〟として知られていて、ユダヤのこよみの第七ケ月目にあたるニサンの十四日にもよおされたのであって、それがユダヤの〝すぎこしの祝い〟であったのです。古代の教会はユダヤ人の〝すぎこしの祝い〟のころにあったキリストのはりつけを記念してその祭りをやりました。それは週の一定の日ではなく、年年まちまちでした。

五世紀のカシアヌスは次のように書いています。「原始キリスト教会の完全さが傷つけられない状態にあったかぎり、四十日の祭礼（四旬節）は存在しなかったことが知られるべきである」イエスやその使徒たちや初期の教会は約三二五年までは四旬節も復活祭もやりはしなかったのです。その二つの祭りは教会会議の布告によって教会でとり入れられるようになったのであって、教会会議がキリストの追随者によって祝われていた〝すぎこしの祝い〟のかわりに、バビロニア人の復活の祭礼を用いるようになったにすぎないのです。（未完）

自然力の活用

T生

自然界は、万人誰もが肯定する至極当然の現象を通じて、その活動の根本原理を表現しています。

一、今あなたは畳の上に坐っており手に手帖を持っているとします。

(イ) 手帖を持った手を、肩の高さあたりで真直ぐに伸ばし、暫くその儘の姿勢を保って下さい。極く僅かづつながら、手に疲れが感じられてきます。このことは、あなたの体力が時間と共に消費されつつあることを教えています。 ◇消耗力

(ロ) 次に、伸びた手の掌を開いて下さい。手帖は急速に下降し一度畳に当ってパタッと強い音を発し、一寸飛び跳ねたのち、弱いながら再びパタッと音を出して畳の上にとまります。このことから、手帖には、もともとこれを下方に動かそうとするある種の力が働いていることが判ります。しかし、これが地球中心の引力であると決めつけるのは早計です。 ◇下降力

始めの衝突のとき、手帖を畳との間に、かなりの力が働いたことも判ります。 ◇衝突力

また、聴覚に影響を与えたある種の力が放射されたことも判ります。 ◇放射力

二、コップの水

(イ) コップに水を入れ、その水面に静かに縫い針を置くと、それは沈まないで水面に浮いた儘になります。これは、水面に、針を持ち上げるある種の力が働いていることを示します。 ◇表面力

(ロ) 暫くすると、針はある方向に落着き、それからは動きません。これは、空間の中に、針をその方向に安定させる平行力が貫通していることを明らかにします。 ◇方向力

三、紙や布の小片を用意し、プラスチックを毛皮で擦ったのち、これを小片に上から近づけて下さい。小片は吸い上げられます。これは小片の種類によらず起こります。このことは、あらゆるものの中に、外からの刺戟に反応するある種の実質があることを物語っています。刺戟を大きくすれば、リンゴや人体を空中に浮かばすこともできることになります。 ◇実質力

四、今度は視野を大空に向けます。

(イ) 雲が流れているとき、それがほぼ大地に平行に流れているのを確かめることができます。これは大地の中、或いは大地から一定距離だけ離れたところと雲との間に 雲をその高さに保っている、ある種の力が作用していることを示しています。 ◇保持力

(ロ) 空に描く太陽の軌跡は、ほぼ定まった直線です。従って、この自然界は太陽に対し自転していることになります。 ◇自転力

(ハ) 晴れ渡った夜空には、全天に美しく恒星が煌き、大空が偏って遮られてはいないのを感ずることができます。この感じに間違いがないとすれば、全天から地上に対して、ある種の力が押し寄せていることを認めなければなりません。 ◇天空力

◇ ◇ ◇

紙数に限りがありますので、以下には、以上に挙げた諸力を分

析していって了解できた結果の一部のみを記すことにします。以上の諸力が、どんな基本原理から生まれているのか突きつめていって見出されたのは、次のような簡単な原理に尽きます。

「万物は常に一体になろうとしている」

現代科学的には、消耗力は「エネルギー」、下降力は「質量」衝突力は「撃力」、放射力は「波動」、表面力は「表面張力」、方向力は「磁気」、実質力や保持力は「電気」、自転力は「スピン」、天空力は「宇宙線」と、それぞれ関連することになります。尚、天空力は、本質的には、磁力同様、光力です。

現代の大部分の科学者達の考える分立法則の込み入った組み合わせを排し、直接、基本原理を生活に適用することこそ、自然界を調和して生きていくためになさねばなりません。基本原理からいくつかの永久動力発生法を考え出すことができます。

ここに示したのは、その一例です。これを一家一台備えることによって、一切の物理的動力は各家庭で自給できることになります。（注。左の図を参照）

最後に、磁気を活用すれば、どんなに生活が向上するか、例をもって示します。

一、強磁場中に衣服を入れることにより、完全に除塵し活力を与えることができます。

二、農地を円錐型磁気壁で囲うことによって作物の質を上げ、収穫を倍化することができます。

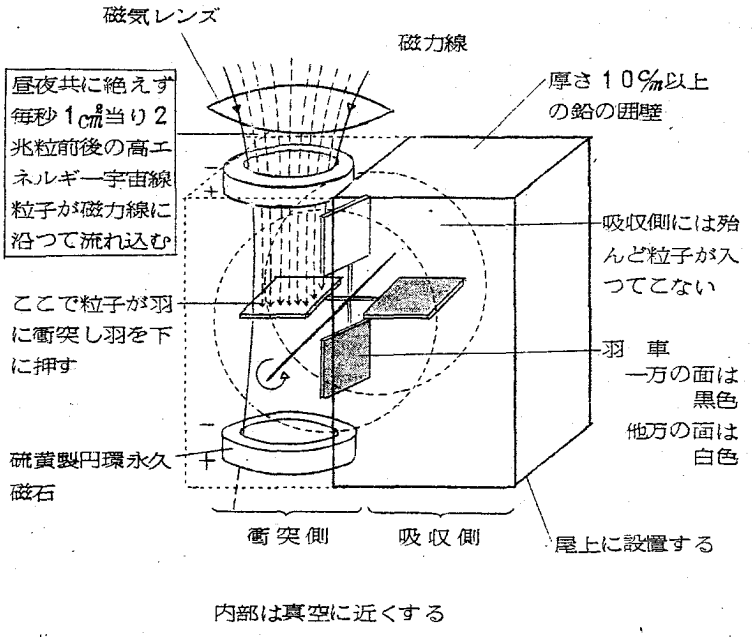
三、どんな土をも、強磁場内で加工して強靱な建築材料とすることができ、これを用いて磁場構成の建築をすれば、冷温房、除塵、防腐、温度制御を兼ねた家屋ができます。

四、円環永久磁石による磁気管で都市内外を結べば、磁気振動によって、熱、動力、音声、影像などを伝送することができます。

自然力を本格的に活用するときがくれば、政治、社会、経済、文化の全般に、画期的な改革が波及するのは全く明らかです。

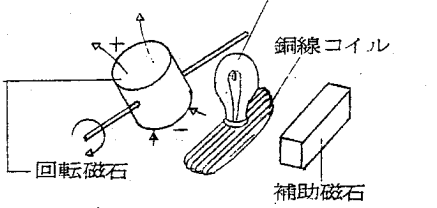
真の宇宙時代の開幕を望むすべての人々よ、今こそ立ち上がり一致協力して真の宇宙時代を築き出そうではありませんか。

1. 光力発動機

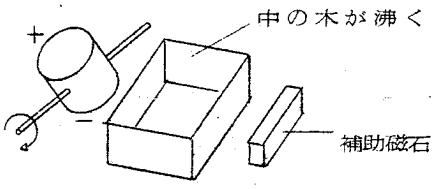


4, 動力変換法（コードの差込み不要）

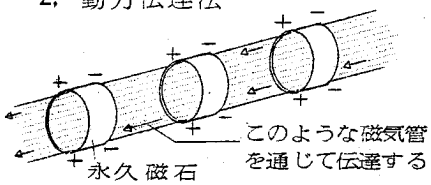
直接発光法　例



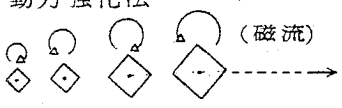
直接加熱法　例



2, 動力伝達法



3, 動力強化法



永久磁石同志の感応回転
を利用する

科学トピックス

百十人の赤ん坊

核実験から出てくる死の灰が人体の健康に及ぼす危険性を割り出すためのあらゆる真剣な努力の結果、大体に二つの特徴があらわれている。

一、いかに注意深い研究がもたれても危険度の測定は不正確である。なぜなら入手できる証拠が不十分であるからだ。

二、証拠がいかに不確実であっても、科学者連によって得られた結論は合理的に一致している。

そこで、ケネディー氏に忠告をしている専門家の集まりである連邦放射能対策委員会が先週最初の報告書を発表したときには、ちょっとしたショックを与えた。初期の研究の例にならって、この委員会も「一九六一年中に見られた実験により、健康に悪影響を与える危険性が少し増している」との結論に達した。

しかしこの報告書を特色づけたのは、実験を続ける国家群の一つがこの死の灰の危険性にたいして公式に詳細な数字をあげた事実である。米国ではあらゆる動機から毎年百七十万の死者が出るが、報告書によればこのうち四十名はたぶん死の灰に起因する白血球増加病または骨ガンだろうという。しかも次代に生まれる米

国のざっと百十名の赤ん坊（すなわち現在生きている人たちから生まれる子供たち）は、死の灰のために不具者のままで生まれるかもしれないといっている。これが意味するところは、この不具の赤ん坊たちは遅進児であったり、目をもっていなかったり、耳がなかったり、奇形であったりするのであって、百万人に一人の割合で生まれることになるというのである。

さっきの四十名の大人とこの百十名の子供は国家の政策にどれほどの影響を与えるだろう。わかっているのは、ケネディー氏が実験を続行するというげんしゅくな決定をなしたときに、彼は以上の数字を考えずにはいられなかったということである。（ニューズウィーク）

イン石の神秘

太陽系内の他の場所に生命が存在するかどうかというこれまでの大きな疑問は、宇宙飛行士たちが地球の近辺の遊星やアステロイドに足跡を印するまで解けないだろう。ところが、ある場所ではこの議論が続けられている。

先週（一九六二年五月上旬）ニューヨーク科学アカデミーで、二十名ばかりの世界一流の生物学者、古生物学者、物理学者、化学者連が集まって大気圏外の生命に関する最新の証拠物を検討した。

この討論におけるおもな問題となったものは、一八六四年五月にフランスのオルゲイユに落下した一個のイン石であった。このイン石の細片と抽出物を顕微鏡で検査した結果、フォルダム大学の化学者バーソロミュー・ナギーの指導する一団は、形の丸いかまたは多角形のそれぞれ異なるタイプの微粒子を二ダースばかり発見したのである。この微粒子のなかにはサボテンのようなトゲをもっていたのもあるし、また被覆物でおおわれているのもあった。そして科学者たちが結論づけたのは、これはイン石にくっついて地球へ飛来した或る生命が化石になったものだろうということであった。

（おそらく火星と木星のあいだにあるアステロイド帯から来たものだろうという）。

ところがシカゴ大学の化学者エドワード・アンダーズおよび病理学者のフランク・フィッチは右の主張に極力反対して出た。そして二つのうちどちらかになるという二通りの説明を加えた。すなわち、その微粒子は風媒による受粉した穀粒の如き地上の物質であって、イン石が落下したフランスの広野でくっついたものか、または〝自然のいたずら〟で、偶然に生命体のように見える無機物の微粒子なのだというのである。

ノーベル賞をとった化学者のハロルド・ユーリーがこの非公式な討議で議長をつとめたが、彼はこの問題について次のような発言をして特色づけた。「写真にとれるではないか。何かがある」英国のひょうきんな化学者J・Dバーナルは警告していった。「顕微鏡に見えるものを信じてはいけない。懸微鏡は人をからかうことがあるからね」一学者はぶっきらぼうに口をはさんだ。「その方法は不充分なものという必要がある」

（水を求む）　しかし大英博物館のロバート・ロス博士によって新しい証拠が提出された。彼はそのイン石の破片について実験

をくりかえした結果を報告してグループを驚かせたのである。フォルダム大学で応用された技術から多くの欠陥をとり除いた入念な実験法を詳述したのち、ロスはみずから発見した三種類の微小体について説明した。つまりそこには一つの壁——たぶん細胞壁と思われるもののともなった球体の物質があったのである。そして微小体の次のグループは「つぶれた胞子の膜皮のように見える」ものであった。黒板のほうへ歩み寄ってロスは彼の最も重要な発見物のスケッチを描いた。それは中空の管のついた膜の断片で、顕微鏡でのぞいたときのキノコに似ていた。ロスはいう。「例のイン石のなかには生物学的な有機体のように見える物がある。私はそのなかに有機体があると信じている——しかしそれは科学者が証拠とみなすようなものではない」

個人としてのユーリー博士は「そのキノコ状の物にいたく心を動かされた」のである。

ナギーの発見が確証されるまでにはまだ多くの研究が必要である。ユーリーが指適するところでは、生命の創造には海洋または湖を必要とするけれども、太陽系内の地球以外の場所では水が極端に不足しているという。バーナルは忠告していった。「われわれはあらゆる問題を知っている一団の人人を必要とする。そうすればロケットなどをわずらわさなくてもこの問題を解決できるのだが——」（ニューズウィーク）

◇　◇　◇

マリナー2号は報告した
金星には生物がいる？

米国が昨年八月二十七日にケープカナベラル基地から打ち上げた金星ロケット〝マリナー2号〟は、その後順調に飛行を続け、二億九千万キロを飛んだのち、十二月十四日に金星に最も近い地点を通過したと米航空宇宙局から発表されました。このときの金星表面からの距離は三万三千九百キロと算定されています。このときロケットの二種の電子走査器で金星の観測が成功したのですが、そのうちの一つであるマイクロウエーヴふく射計が金星の雲を貫通して金星表面の温度を測定しました。その報告によって金星は従来考えられていたよりも低温であることが判明したために米科学者間で俄然金星上の生物の生存説がとなえられ始めたということが十二月二十九日付の毎日新聞に載っています。以前行なわれた地上からの電波発射による調査では金星の温度は摂氏三百二十四度前後で、いかなる形の生命にも高温すぎるために金星には生命は存在しないといわれていたのですが、これが完全に誤っていたことをマリナー2号が示したわけです。これまでのところマリナー2号の測定の結果としては十二月二十六日の全米科学促進協会の年次総会で発表された内容が最新の情報でありますからそれ以上のことは十二月三十一日現在ではわかりませんが、とにかくアダムスキ氏の主張も少しづつ科学によって確証されてゆくといった感がします。（編者）

金星文字は解読された？

アフリカの新聞〝ディー・ズーダフリカンス・シュテム〟紙の一九六二年四月二十九日付によると、一九五三年に刊行されたアダムスキ氏の〝空飛ぶ円盤実見記〟に掲載された有名な金星文字を、ヨハネスブルクの一技師が解読したという。

その技師バシル・ファンデンバーグ氏は地球の引力を克服する問題を解決したといっている。彼は空飛ぶ円盤に応用されているエンジンとよく似た二個の電気エンジンを発明した。それは磁石によって推進されるもので、外部から電気エネルギーを供給する必要はない。「これは全く簡単なものなので、『七才の子供でさえもこんなものを思いつく筈だったのに』と科学者は驚くだろう」と彼はいっている。また彼のいうところによると、このエンジンは革命的なものとなり、未来の航空機は燃料を全然必要とせず、宇宙飛行を可能ならしめるだろうという。このエンジンの設計図は近いうちに――たぶん一九六三年中に――米国へ送られて、十八ヶ国の科学者連に見せることになっている。

またファンデンバーグ氏は、例の象形文字を解読するにあたって彼は一金星人から援助を受けたと称している。彼はその文字の解読を始めてから六ヶ月間頑張ったけれども何らの成果も得られなかった。そこで彼はアダムスキ氏に頼んで原板のコピーを送ってもらったのである。ところがその写真中の図はただ文字だけをあらわしたものでないことを知って彼は驚いた。すなわち文字以外に、円盤、葉巻型母船、推進に用いられる二個の磁気エンジンなどが描かれてあったのだ。そして地球の引力に打ち勝つ秘密が洩らされていたのである！　ファンデンバーグ氏の言によれば、この写真こそは彼の生涯で最も驚嘆すべきものであるという。彼はこの研究に十年近くをついやしてきた。そしていつも新しい暗示を発見している。現在、あの象形文字の解読に成功しているのは世界で彼だけであって、地球上のあらゆる科学者が夢想しているにちがいないものを彼は獲得したといっている。

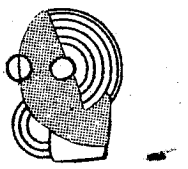
新聞記者が近寄るために自分の秘密が洩れることを心配しなかったかと新聞社から尋ねられて、彼は「一般人が私の発明を疑っているために秘密は保たれています」と答えた。

ファンデンバーグ氏はまもなく二個のエンジンを完成させる計画をしており、その後に発明の青写真をたずさえて米国に向かう予定である。すでにメキシコ政府はこの三十五才の発明家に招待状を出しており、彼の発明の完成のために立派な研究所を建設することになろうという。

〔編者注〕右の情報はニュージーランドのＧＡＰリーダー、ヘンク・ヒンフェラーからもたらされたものですが、これは世界の円盤研究界で話題となり、英国の円盤研究誌〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌もとりあげています。これについてアダムスキ氏が一九六二年十月十一日付でウィーンのドラ・バウエル女史に送った書簡によりますと、ファンデンバーグ氏がア氏に協力したことの真実性をア氏は証言し、メキシコ政府の寛容と親切さをたたえています。

質疑応答

C・A・ハニー



〔質問一〕テレパシーについてもっとくわしい事を知りたいと思います。私には一種の心霊的なもののように思われます。（フロリダ州、A・M・H）

〔答〕　テレパシーとはいったい何かということについて詳細を知りたいという意味の手紙を私は沢山受けとっています。しかし充分に説明すればかなり長くなります。アダムスキ氏は百頁から成る〝テレパシー〟と題する著書のなかに基礎的な解説を掲げています。

テレパシーは読心術ではありません。もっとはるかに大きな意味を含んでいます。それは本来聴覚器官とは関係がないので、人間はテレパシーによる通信を〝聴く〟ことはできません。テレパシーの受信は、あたかも自分の想念であるかのように心のなかへやって来るもろもろの〝考え〟または〝感じ〟を受けとることを意味します。したがってテレパシーは音声を聴くことではないのです。また本来それは心霊的なものではないので、この問題にはいかなる型の恍惚状態（トランス）または半恍惚状態（セミ・トランス）も関係はありません。

〝霊媒〟という言葉は何を意味するでしょう。〝霊媒〟とは、現世に生きている人と死んであの世にいる人の霊魂と思われているものとのあいだの経路として役立つ人をいいます。しかしこんな場合に実際には何が起こっているかということを別な記事で書いたことがあります。

恍惚状態は大体において完全に意識を失った〝深い睡眠状態〟ではなく、むしろ目覚めてはいるけれども潜在意識はコントロールされているといった白日夢またはボンヤリとした状態に似ています。この場合表面の心は解放されていますので、本人は潜在意識のコントロールに応じるわけです。死者の霊魂が介入して来るのではないのです。多くの場合に死者の想念が霊媒の潜在意識を刺激することもありますが、それは地上の何かの細胞に印せられてとどまっている想念なのであって、死者から直接に来る想念ではありません。

ブラザーズによって応用されているテレパシーにはいかなる種類の霊媒や恍惚状態も必要はありません。ブラザーズは地球の霊媒の声帯を借用などしないのです。世界中に発生しているメッセージの受信現象（注。霊界通信的な方法で宇宙人からメッセージを受けとったと称する例）は、別な遊星に住む人人から送られるメッセージの真実の受信ではありません。

あなたはだれかの手によって自分の感覚器官をマヒさせてもらいたいのですか、それとも真理を望むのですか。真理を望むならば、長いあいだ人間の進化をとめていた古くさい迷信や信仰をあなたは捨てる必要があります。なぜブラザーズは、もっと早く着陸して彼らの姿をあらわさなかったのだろうとあなたは考えるか

もしれません。あらわさなかった理由の一つは、地球の人間は誤った考えを捨ててより高度な知識を得るための準備をすることをこばんだからです。

地球よりも進化した遊星と地球以下の低級な遊星の両方から、想念は絶えずこちらへ来つつあります。これをもしだれかがキャッチしたならば、通常これが別な遊星から来たのだとは誰も気づかないで、地球人から発せられたものだと思い込みます。「私はウ・ラム・アである」とか、「私はアシュターだ」とかいったりする例を信じたりしてはいけません。（注。右のいずれも霊界通信的な方法で受信された仮空の宇宙人の名前）特定なグループに与えられる忠告に満ちた長いメッセージなどもホンモノではありません。グループによって受信されるこうしたメッセージ類は真実のブラザーズから送られるのではないのです！　どこから来るのかといいますと、これは受信したと称する本人（または霊媒）の潜在意識から来るのであって、他の場所から来るのではありません。このいわゆるメッセージ類はそれ自体の価値をもっていることもあるかもしれませんが、だからといって高度に進化した遊星人から来ると考えるのは禁物です。

決して真実のブラザーズとは関係のない〝心霊的な交信〟には〝よく〟文字板（ウイジャ・ボード）〟や〝自動書記〟などが応用されますが、これらは絶対に信頼できないものです。

あなたがブラザーズの知識のまじめな探求者であるならば、何よりも先ずアダムスキ氏の著書〝テレパシー〟を研究されることをおすすめします。この書はテレパシーに関する書物のなかで最上のものであると思います。（注。この書の邦訳版については別掲記事をごらん下さい）

テレパシーの科学的考察

細胞から細胞へ伝わる印象

ロイ・ラッセル

次の記事は肉体細胞間に伝達される想念の理論について科学者とアダムスキ氏がたがいに論じ合っているという意味のものではない。いったいに科学者は人体の構造と維持についてのみ言及しているけれども、アダムスキ氏は細胞がもっと一般的な性質の感情や印象などを伝達するのだと述べているのである。しかし最近ある科学者連は細胞は原子の意識的なグループであると言明している。アダムスキ氏は〝同乗記〟のなかでブラザーズから伝えられた知識としてこのことを述べており、氏の著書〝テレパシー〟において細胞から細胞へ伝わる印象の重要性を強調している。英国の科学雑誌〝ディスカヴァリー〟の一九六二年四月号に掲載されたE・J・アンブローズ氏の〝細胞の表面〟と題する記事には最新の科学的な諸発見について述べてある。この論文には〝細胞間の連絡〟という副題がついているけれども、その一節に次のような個所がある。

「細胞膜の最も重要な機能はおそらく近隣の細胞群とのあいだ

の信号または情報の交換にあるだろう。このことは神経組織のなかにはっきりと見られるのであって、そこでは神経衝動が細胞膜によって送り伝えられ、やがてそれがノイロン連接（神経刺激伝達部）へとどく。すると信号が一つの神経繊維から新しい繊維へ化学的な方法によって伝えられ、神経組織中を細胞から細胞へと通過するのである。現在この信号は他のタイプの細胞のあいだをも通過するかもしれないと考えられている。この信号類のたえまのない通過が組織の発達を支配するということはきわめて明らかである。電子顕微鏡は、この信号類がどのようにして送られるのかを理解するのを助けるかもしれない二、三の解決のカギを与えている。神経衝動ほどにいちじるしくない、活動のにぶい電気的な影響が信号を細胞から細胞へ通過させるということもありうることである。かかる影響が組織の秩序正しい発達を導き正常な生長をコントロールするのかもしれない。

細胞のさまざまの運動はその未発達なあいだか、または傷ついた組織の再生にさいして、驚くべき正確なコントロールのもとにあるということは明らかである。そうでないとすれば種種の複雑な組織の組み合わせは絶対にできないだろう。

たとえば傷ついた組織を健康な正常な組織にしたり　肉体のもとの形に修復したりして、その仕事が完成するとそれ以上は肉を盛りあげたりしないという人体の驚異的なコントロールをこの場合は意味している。

少し話が変わるが、右の記事によると細胞の膜はきわめて有効な電気的なヨロイだという。また細胞が原子の意識的なグループであることを発見した例の科学者たちは、ガンを研究しているあいだに、ガン細胞膜を電界のなかにもってくると、そのガン細胞の陰電荷も変えられることに気づいた。それはまた普通の細胞よりもほとんど二倍の容量をもっているという。

以上の抜粋が少少筋道の通らないものに思われるならば、それはもとの記事が学術論文であるためであって、全文を掲げてもおそらく普通の読者にはっきりとした概念を伝えることはできないだろう。しかし要点はすでに述べられている。今や科学者たちは〝細胞から細胞へ伝わる通信〟について語っているのである。意識をもつ実体のように見えるこの細胞については、オーストラリアのテレビ番組〝公聴会〟の席上でシドニー大学のある病理学者も発表した。この番組はマルコーム・マッケイ博士の司会によって開かれた。とにかくこの新発見はわれわれにとってニュースである！　また右の抜粋は〝同乗記〟に述べられている物理的な宇宙を扱っている知識がいかに確証されつつあるかを理解させるばかりでなく、想念やテレパシーのごとき抽象的な問題を扱っている複雑な新知識が、次第に科学者によって確証されてゆく傾向があることを認識させるものである。

ところでテレパシーの問題については、同じ雑誌の別掲記事である〝言語と想念〟と題する一文を検討してみるとおもしろい。筆者はそのなかで次のようにいっている。

「ながいあいだ次のような疑問について議論が行なわれてきている。すなわち(1)話すことと考えることとは同じ動作の二つの面をあらわすものか。(2)想念はしゃべり出すために欠くべからざるものなのか。(3)しゃべるということは想念の表現なのか。(4)それとも心のなかで考えることをしないで話すことは可能か。（この

疑問にたいする解答を与える人があっても賞金は出ない！）これを逆にいえば言葉のない想念というものがあるのだろうか。(5)あるいは想念とは音声下の言語にすぎないという行動主義者の意見をわれわれは受け入れることができるだろうか」

忍耐強い研究の結果、次のような解答が得られた。以下はその論文の抜粋である。

「言語としてのかたちをなす前に存在するのは、われわれがある同時的な絶対的な実体だと表現する〝何ものか〟である。（これはアダムスキ氏がいっている〝感じ〟または〝印象〟である。ロイ・ラッセル注）しかしこれはそれを感じたときにはっきりと判読はされない」

〝同乗記〟に述べられているような体験をアダムスキ氏が一般人に伝えるのにはかなりな困難をともなったにちがいないということをわれわれは容易に感じることができる。氏が見たすべてのものには比較対照すべきものがなかったからだ。いいかえれば適切な言葉が見あたらなかったのである。このことは一般人が円盤の目撃報告をする場合にいかに類似物で表現しようとしているかをみてもわかる。葉巻きタバコ、コーヒーの台皿、パンケーキ、涙のツユ、といったものにたとえて、自分たちの見た見なれぬ物体を表現するのによく知っている言葉を苦しまぎれに用いるのである。

さて、前記の論文〝言語と想念〟にかえることにしよう。われわれは純粋な想念を感受するときに、それはまだ判読されていないということに注意する必要がある。たとえば、三名の人がそれぞれ異なる言語で話しているときに、『雨が降りそうだ』とか、『だれかが自分たちを見つめている』といった想念を三名とも感受するとする。するとこの場合、これは一つの〝感じ〟として三名に来るのであって、そのあとで三名はこの言葉のない意味を各自の言語に組み立てるのである。

ここにおいてわれわれは、ＵＦＯ、宗教その他私的な集会で人人がよくやっている心霊的な実験に落とし穴があることに気づくのである。たしかにこうした実験の当事者は純粋な宇宙的な想念または印象類を感受することはあるだろう。しかし感受されるものとの印象を他人に伝えるのに、利己的な動機または個人的な信念を適切な言葉の選択に全く加えないで、その言葉のない意味を言語に組み立てるのはいったいだれがやるのだろうか。

これまでにわかったように　細胞は意識ある物質なのである。そして純粋な想念は言葉をともなわない。これをもう少し確実にいうとなればおそらくアダムスキ氏は次のようにつけ加えるだろう。「あらゆる自然は意識をもっていて、みずからを創造者の指図にまかせている。ただ人間だけが孤立していて、自身で作り出した言葉や意見で分裂しているのである」と。

以上の記事はテレパシーなる語にたいしてアダムスキ氏のいっているのと同じ意味を与えるものである。すなわち個人から個人への想念伝達ばかりでなく、無限の宇宙のあらゆる原子によって表現される言葉をともなわない宇宙語を意味するのである。

（注。筆者はオーストラリアＧＡＰのリーダーで、この記事は彼が出している機関誌〝スペイス・トーク〟一九六二年七月―八月号に掲載されたもの。夫人のパールとともに活躍しているオーストラリアきってのアダムスキ支持運動家）

「テレパシー」邦訳版の刊行について

アダムスキ氏著〝テレパシー〟の邦訳版を数年前に一度出したことがありますが、今度その内容に全面的な改訂を加えた改訳新版が出版されました。新書版のスマートな装丁で携帯に便利でもあり、本文には小見出しをたくさんつけておきましたから読むのに楽です。一度目を通されますようおすすめします。すでに書店に出まわっているはずですが、入手できない方は直接出版社へご注文下さい。

◎G・アダムスキ著、久保田八郎訳「テレパシー」
◎一部定価二百三十円、送料四十円
◎東京都文京区春日町三ノ四　文久書林
◎振替　東京二五二一

最近一般にテレパシーという言葉が知られるようになってきました。これは科学者の関心がたかまってきたこともその一因ですが、テレパシーを扱った書物がボツボツ現われていることにもよります。近ごろまでベストセラーズに入っていた光文社の〝ヨガの楽園〟という本には、インドのヨギ（ヨガの行者）のなかにすばらしいテレパシーの能力をもつ人がいて、それらが興味ある実験をやってみせる有様が紹介されています。たとえばマッチ箱と財布の中味をいいあてたり、八十キロも離れた町にいる人を呼び寄せたり、著者が山中で紛失した万年筆をヨギが苦もなく拾ってきたり、箱のなかの数字の書かれた紙片を透視したりして著者をア然とさせるわけです。そしてその練習法なども述べてありますが、特に興味深いのはテレパシーについてヨギが次のように語っている点です。

(1)「動物どうしは主としてこのテレパシーで感じたり、通信し合っているのだと思う。人間にも潜んでいる原始本能の一つだが、文明生活で使わないために退化しているのだ。ー中略ーこの潜在能力は誰にでも開発できるものなのだ。意識の束縛や感情の混乱は、相手の思考を受け取るのに、いちばん大きな障害物だ」

(2)「テレパシーは何もむずかしいことじゃないよ。医学知識皆無の母親が、直感的に自分の子の病気を見分けたり、その生死を予感したりすることがあるだろう。それは、その母親が自分を子供に捧げつくして、ただひとすじに思いをその子だけにこらしていて、他のことは何も考えないからだ。相手のことだけに意識を集中し続けているとき、はじめてテレパシーを感じるのだ」

(3)「テレパシーで呼び寄せられて八十キロの遠方から来た人がいう）私はきのうまでベラプールの近くで瞑想行法を続けていたのだ。もう十日ほど続けるつもりでいたけれど、ここで呼んでいたことがわかったから、やってきたんだ」　「どうしてそれがわかったんですか」　「わかるというんじゃないね。なんとなく感じたんだよ。来たくなった、といったほうが正確かな」

(4)「この練習は、はじめは二つに分けたほうがよい。ひとつは相手に感じさせる練習、もうひとつは、感じる練習だ。ー中略ー感じる練習というのは脳を無思考状態にする、すなわちくつろぐ練習だ。この二つを合わせたものがほんとうの瞑想だ。」

(5)感じる練習については「くつろげばいいのだ。人間は眠っているときが、いちばんくつろいでいる時だから、起きていて、この眠っている時のまねをすればよい」（注。傍点は編者による）

以上の言葉を仔細に検討してみますと、これらは結局アダムスキ氏が〝テレパシー〟のなかでいっていることとほとんど同じであることがわかります。たとえば(1)の「意識の束縛や感情の混乱は相手の思考を受けとるのにいちばん大きな障害物になる」というのは、感受する場合に意識をなにかに集中させないで広く開放することと、感情を抑制する、即ちセンスマインド（感覚器官の心）をコントロールすることを意味しますし、(2)の「相手のことだけに意識を集中し続けているとき」というのは相手との一体感をもつことをいっているようであり、(3)の「なんとなく感じた」というのは相念波動によって印象を感受したことであり、(4)と(5)の「くつろぐ練習」こそはアダムスキ氏のいう弛緩と同じことであると思われます。私はこの本の著者沖氏がウソを書いているとは思いません。インドの山中にテレパシーのすばらしい能力をもつ人人が現に存在していることは事実なのであって、このことは他の書物にも例証してあります。そしてこのヨギたちがいっているテレパシーの理論とアダムスキ氏の説く理論とがほぼ完全に一致しているということは驚くべきことであって、ここにもわれわれはア氏が真実の人である傍証をもつことになります。もっともア氏はインドの哲学者でバナラス・ヒンドゥー大学の教授であったS・K・マイトラ博士からインド哲学やヨガなどについて教えを受けたと思われるフシがないこともありませんが、ア氏のいうテレパシーはヨギのテレパシーよりももっとはるかに高次なものを含んでいるように思われます。あらゆる細胞や原子は意識をもつ実体で、自然の万物は普遍的な宇宙語を話しているというア氏の理論は、およそ一般受けしないかもしれませんが、別掲記事にもあるように、人体の細胞が意識をもつことはすでに一部の科学者も研究していることですし、テレパシーの科学的な実験はアメリカあたりでもさかんに行なわれているのですから、いずれは〝テレパシー時代〟ともいうべきときが来るのではないでしょうか。そしてそのときこそ何らの誤解のない真に平和な社会が実現するのではないかと考えられます。そして万人がテレパシーの能力をもたなくても、テレパシーの何たるかを人人が知って、だれもがそれに関心をもつようになれば、これまでのさまざまの哲学がいったいどの程度のものであったかということもわかってくるでしょう。なぜならテレパシーの能力を引き出すということは、個別化された主義・思想、ひとりよがりの意見・判断を捨てることにほかならないと思われるからです。

アダムスキ氏の説く想念波動についてもこれを一笑に付して否定するのは早計です。精神療法で奇蹟的に難病を簡単になおしておられる新精神学会の巽直道氏のグループでは（神戸市兵庫区矢部町五三）〝念写〟という実験を試みてかなりの成果をあげておられます。ある文字か絵をしばらくジッと見つめてその印象を想念に託してかたわらにおいてある未使用の写真用フィルムに念じ込み、あとでそれを現像するとまるでカメラで撮影したかのように同じものが写っているのです。編者は数枚の証拠写真を所持していますが、これは明らかに想念波動が空間を進行してフィルムの感光膜に作用したものと考えられます。しかし科学的には未解決です。（編者）

GAPとは

GAPについてもっとくわしく説明してくれという照会が多くありましたので、ここにあらためて説明します。

◎GAPというのは英語の Get-Acquainted Program(知らせる運動)の略で、これはアダムスキ氏が最初の著書"実見記"を出して以来世界中から手紙が殺到するようになったために時間的にも経済的にもそれらの全部に返事を出す余裕がなくなってしまった折、ブラザーズのヒントによって各国の熱心な支持者を一人リーダーにきめ最新の情報や声明などをコピーしたものをまずそのリーダーに送って、各リーダーはア氏の代理人としてそれを自国語に翻訳した上で自国内の関心のある人にその内容を知らせるという組織になっているものを意味します。これは当初オーストラリアから始められて現在は十三カ国十六名からなっています。又このリーダー達はたがいに横の連絡もとっていて意見を述べ合ったり各自で出している機関誌の交換なども行なっていますから、円盤、宇宙人問題についてどこの国がどういう状態にあるかということもよくわかります。この内訳はデンマークのハンス・ビーターセン少佐、オーストラリアのロイ・ラッセル夫妻、ニュージーランドのヘンク・ヒンフェラー夫妻、オランダのレイ・ダクィラ女史、ベルギーのメイ・モーレー女史、オーストリアのドラ・バウエル女史、フランスのシュザンヌ・ソニエ女史、英国のレズリー・オトリー氏、イタリアのアルベルト・ペレゴ博士、メキシコのマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ女史、英国のゴードン・F・ステント氏、ドイツのエリカ・クーレンカンプ女史、フランスのエレーヌ・J・アケルマン女史とその協力者フィリップ・ヘブレシュ氏、ドイツのイルゼ・ヴェゲナーマウアー女史、英国のジョン・M・レイド氏、南アフリカ、プレトリアのエドガー・ジーファース氏、それに日本のクボタとなっています。この他にインドのS・K・マイトラ博士も名をつらねていましたが、先ごろ死去されました。

◎米国ではアダムスキ氏の片腕としてキャロル・ハニー氏が活躍していて、アダムスキ氏から出される新しい情報はすべてハニー氏が編集した上で同氏が発行している月刊誌"コズミック・サイエンス・ニューズレター"に掲載されます。本誌に掲載する記事は主としてハニー氏のニューズレター中の記事を翻訳転載したもので、その他に各国から来る機関誌中の記事からとり上げて載せることもあります。アダムスキ氏から直接に私信や重要な文書のコピーがリーダーあてに送られて来ることもありますが、原則としてその内容は公開してはならないことになっています。またア氏の著書やハニー氏のニューズレターの翻訳権は右のリーダーだけに与えられていて、これ以外の人に無差別に与えられることはありません。

◎各国GAPのリーダーはそれぞれ熱心な支持者を糾合して団体を作っており、各自が自国語で編集した機関誌を会員に配布していて、それが結局知らせる運動になるわけですが、これはあくまでも奉仕として行なうべき仕事ですから、営利事業化することは大体に禁じられています。かつてドイツのカール・ファイトが円

盤の啓蒙運動を企業化して大儲けをやったために、彼はＧＡＰから除外されました。このことについて詳細な内容を私はヨーロッパのある円盤研究家連から聞いています。しかし各国ＧＡＰはごたぶんにもれず資金に余裕がないらしく、各国から送られて来る機関誌は大半が隔月刊で発行されています。

◎ＧＡＰ間の連絡には主として英語が用いられます。ところがなかには英語の不得手な人もあって、たとえばフランスのシュザンヌなどは必ずといってよいほどフランス語で書かれた私信や文献をよこしますし、ドイツからはドイツ語で、メキシコからはスペイン語による参考資料をといったぐあいで、国際色は豊かですがこれらをすべて私一人で訳すにはかなりの語学力を必要とするために外国語の習得だけでも困難ですが、自分の勉強にもなり他人のためにもなることだと思えばむしろ楽しくもあります。しかし私がこの仕事で痛感しますのは、世界は一種類の言語に統一されなければダメだということです。そしてまた日本語が世界という広場のなかでいかに通用しない言語であるかということを身にしみて感じました。言語の統一こそはテレパシー以前の問題であるということになりそうです。

◎ＧＡＰの最もさかんなのはたぶん英国とニュージーランド、それにオーストラリアあたりであろうと思います。本誌は発行されるごとに一応各国へ送っていますが、受けとり人のなかで日本語がかろうじて読める人はフランスのシュザンヌの協力者ジャンくらいのもののようです。しかし私は本誌とは別に英文ニューズレターをだいたい二、三ヵ月に一度の割で海外へ発送していますし私信による連絡をひんぱんにやっています。

◎最近英国のレズリーから来た手紙によりますと、円盤研究誌として世界の最高権威を誇る英国の〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌の編集陣は、アダムスキ氏の体験が真実であるという重大な確証をつかんだので、今後はあげてア氏の支持を続けることにきめたということです。右の研究誌はＧＡＰの正式な加盟団体ではありませんが、早くからア氏を支持していたことは、ながいあいだ一貫してア氏の円盤写真を真正なものとして同誌が頒布してきた事実をみてもわかります。他の円盤写真は取り扱ってはおりません。

◎この他にもアダムスキ氏を支持する個人や団体はたくさんありますが、なかには自身の社会的地位にさしさわりがおこるために公然と名のらない人もいます。

◎ＧＡＰは営利事業ではなく、政治や宗教とはいっさい関係はありません。また大衆のすべてに知らせようという運動でもありません。したがってメンバーをふやすために躍起になって宣伝をすることは禁じられています。ただアダムスキ氏の体験に関心をもち、宇宙哲学やテレパシーの研究を志す人にのみ新しい情報やニュースをお伝えするのですから、メンバーは少数でもよろしいのです。ア氏やハニー氏は「関心のある人だけに知らせよ」ということを極力強調しています。関心のとぼしい人をひっぱってきてやたらに頭数ばかりふやしても意味をなさないのです。

◎本誌は隔月刊として発行を続けます。読者の方のご意見や論文なども載せたいのですが、頁数が少ないためにそれができないのを残念に思います。（編者）

核実験は中止されねばならない

G・アダムスキー

人間が生活において生み出しうるよき物事を楽しむために、われわれの子孫の未来の生存にそなえてこんにち多くの努力がなされています。この同じ目的のために各種の宗教団体や多数のグループが活動しています。時が来ればこの努力のすべては人間の幸福にとって実を結ぶことにもなるでしょうが、人間が行動する割合でもってわれわれが気づく以上に早く一つの崩壊がもたらされる可能性もあります。人類全体が結束して努力すればこの世界は地上の天国にもなるのです。これをすべて成就させ、この種の生活のために（地球の人間によって楽しまれるような生活のために）方針が確立されるということになる場合、人間が地上に生き残らなければ、どうしてそれが達成できるでしょう。

現在放射能の脅威は大抵の人が気づいている以上に危険になっています。著名な科学者連の推測にしたがえば、もし人類が核戦争を起こせば現代の人間の労力の結晶を楽しむ人は生き残らないということになります。生き残る人があるとしても子を産むことができなければ何の役にも立ちません。そしてまもなく残存者も死ぬことになり、地球はただ一人の人間もいない死の世界と化してしまいます。

目下世界をおおいつつある放射能によってどれだけの数の人が害を受けているかについて科学者は知る方法をもっていません。治療法がわからないと医師が言明しているある種の病気（複数）が存在しています。それは病名のつけようがないために新しい種類のビールスなのだといわれています。そして世界中の人人が何となく奇妙なタイプの病気にかかっています。

核兵器を有する四ヵ国がみな核実験を続けるならば、どんな事が起こると思いますか。続けるかもしれない機会はあります。推測ではイスラエルとたぶん中共が年末までに新発見の怪物の実験をやるかもしれません。核爆発はフランケンシュタインのようなものです。現在われわれはこれまでに四ヵ国（米、ソ、英、仏）だけが実験をやったにすぎないということに感謝すべきです。

危険ではないというのならば、なぜ政府は役にも立たない防空壕を作れとすすめたりするのでしょう。放射能を除去するため、長年月を要するというほどに大気が汚染していて、しかも最初の原爆の影響がいまだに尾を引いているというのに、いったいだれがネズミの穴ぐらのなかに住み続けることができるでしょうか。最初の爆発以来、実験は続けられていますので、今後核戦争が起ころうが、実験が重なろうがいずれも同じことであって、人間は絶対的な危険度に至るほどの汚染した大気を吸う事になり、これは全世界の人に影響を与えることになります。核戦争又は実験の連続にせよ、人間は進んで絶滅に直面しようというのでしょうか。

生き残った人人も不妊の状態になり、子孫を残すことはできなくなるでしょう。人間の生命を奪い去る力をすでに有している頭上のこの怪物を見る事ができないほどに人間は盲目なのでしょうか。なぜある特定の国だけがその狂気じみた計画を実行し、世界中の罪なき人にかかる終滅とそれにともなうひどい苦痛とを経験させることが許されるでしょうか。世界の人人は自分自身の意見を各自の政府に聞かせ、次いで政府が人間の生命をおびやかしている例の四ヵ国に意見を申し述べるべきであると私は思います。

世界の母親たちが自分の子供をかかる拷問に服させねばならぬ理由はありません。すべては少数の狂気じみた人人によって起こるのです。母親たちは子供を産むのに苦しんでいます。子供までが苦しむ必要はないのにそれが苦しむのを見ていなければならぬという理由もありません。世界の人人の殆どはこの大きな危険を直視できるほどの知力があると思います。悪魔のなすがままにまかせてあらゆる生き物をむさぼり食わせ、人間はそれに対して何事をもなし得ないというわけでしょうか。それとも人類が声をそろえて立ち上がり、この地球上の人間の生命を守ろうというのでしょうか。人間は動物の保護のために各種の愛護団体を作っています。人間としてのわれわれは同じような保護を受けるほどの価値がないのでしょうか。

価値があると私は思います。そこでひとつ公益ということと、創造者がこの地球上においた生命にたいする尊重という見地にもとづいてわれわれで結束し、あの怪物を取り除く方向にむかって前進しようではありませんか。罪のない人人を一部の人間の狂気による絶滅から救い出すための一つの声として、われわれの声を世界中に聞かせようではありませんか。すべての母親は超高空にせよ地下にせよ実験に反対する抗議を自国の政府に申し入れることです。しかし暴力を用いてはいけません。静かな常識ある態度で行なう必要があります。〝エスクァイアー〟誌によれば、世界のたった九ヵ所だけが安全になろうと述べています。

一九五二年に私が他の遊星から来た人とはじめて会ったとき、多数の核爆発の結果について警告が与えられました。〝実見記〟のなかにはこの警告のことが述べてあります。（注　アダムスキ氏がデザートセンターで一金星人と会見したときの模様については〝実見記〟に載っていますが、邦訳版はかなり抄訳してありますので、原書の内容とはいささか異なったものになっています）しかし大衆はあの書物を無視しましたし、現在の危険性をさえも無視していますので、あの会見のときの模様についてもう少しくわしく述べることにしましょう。

私が彼らの飛来の理由をたずねたとき、彼は彼らの飛来の友好的なものであることを私に理解させました。また彼らは地球から放たれる放射エネルギーに関心があるということも私にわからせました。この関心は地球の核爆発にともなって巨大な放射能帯が生じるからではないかと私はたずねてみました。すると彼は即座に理解して「そうだ」というふうにうなずきました。しかし私はなおもしつこく、その爆発は宇宙空間にある物に影響を与えるばかりでなく地球上の人間にとっても危険なのではないかということを知ることを望みました。すると彼は両手で爆発後に生じるキノコ状の雲をかたちづくりながら、こんな爆発があまり多く行なわれた後はそのとおりになるのだということを私に理解させた上

さらに自身の考えをはっきりさせるために彼はまず私のからだに触れて、続いてそばに生えていた小さな雑草にさわり、次に地面を指さし、両手を大きくひろげたり、その他二、三の身振りによって、あまりに多くの爆発が行なわれるとこれらすべてのものが破壊されるだろうということを示したのでした。

「ジス・ウィーク」誌の一九六二年六月十日号に有益な記事があります。それはノーベル賞をとったハーマン・J・ミューラー博士によって書かれたもので、"核実験に関する真相に直面しよう"と題するその記事のなかで博士は放射能の影響による遺伝について次のようにいっています。

「米ソによる核実験の結果、現代人のあいだにしだいに白血球増加病、骨ガン、その他の恐ろしい病気をひきおこしている。また多種類の遺伝上の欠陥が未来の人間にあらわれるだろう。かなりの量の放射能を浴びるために早死にする可能性がある。肉体的かつ遺伝による欠陥が潜在していてそれが遅くあらわれるためにそれはこんにちの放射能が原因をなしているとは個人的に気づかない。次代の人間に加えられる害は直接に放射能にさらされた人よりもかなり大きくなるだろう。」

核実験は米国人と同様にソ連の人間にとっても有害です。一九六一年十月三十日にソ連が六十五メガトンの爆発を実験したのちフルシチョフ首相は世界中からの抗議を"ヒステリカル"だと片づけました。私はこれに同意できません。実験はソ連の国民にとってもきわめて現実的なことなのです。

ソ連によって空中にまき散らされた毒物は、ソ連を通り越して米国だけをおそっているのではありません。それどころか、ソ連は自分たちの死の灰から最も大きな害を受けるでしょう。きわめて多くの死の灰がソ連の実験の行なわれた地域に集中してきているので、彼らは米国人よりももっと長い間影響を受けるはずです。

『絶対にいけない。核実験というこの大きな不道徳行為はこの世からなくさねばならない』とライナス・ポーリング博士はいっています。（"ノー・モアー・ウォー"より）

『そんなことはない』とエドワード・テラー博士はいいます。『核実験による死の灰は心配するほどのものではない。それが人間に及ぼす影響はとるにたらぬものだ』（"ヒロシマの遺産"より）

ここには現代一流の科学者の意見を数例かかげましたが、彼らは核実験問題について米国の一般人と同程度のことしか知っていないということがこれでわかります。

"ロサンジェルス・タイムズ"紙の一九六二年一月二十九日付に興味ある記事がありますので、そのなかから部分的にひろってみることにします。

「宇宙飛行士は子孫がもてぬ？ー　ワシントン（UPI）

未来の宇宙飛行士たるべき条件の一つは、考えられるところでは本人が子供をもとうという望みを捨てることにある。

子供がもてぬという見込みは、宇宙空間の放射エネルギーの危険について最近発表された議会の証言によって暗示されている。

地球から数百マイル以上にも及ぶ長い飛行中に飛行士が放射エネルギーを浴びるのを防ぐ方法はいまのところないように思われる。

軽微ではあっても放射能を浴びることは遺伝上の害を受けるこ

とになり、それが世代から世代へと伝えられるということに科学者の意見はだいたい一致している」

ここでも一団の科学者がたとえいかに軽微ではあっても放射能を少しでも浴びることは人体に危険であるといっています。しかるにテラー博士はなおも放射能の影響は危険なものではなく、たいしたことではないと主張しているのです。放射能の影響について教育を受けている科学者たちが、ほんのわずかな放射能を浴びても危険であると感じているならば、たえまのない核兵器の実験によってひき起こされる諸影響について考えてもらいたいものです。人間の上にあらゆる影響がもたらされるでしょう。

実験がシベリアで行なわれようがジョンソン島であろうが問題ではありません。その毒を一個所にだけ閉じ込めておくことはできないからです。それはちょうど水の入ったグラスのなかへ一滴の毒液を落としてそれが水中にひろがってゆくを防ぐことができないのと同じです。

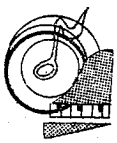
世界の人人がこの怪物に目覚めなければ、われわれや子孫は言語に絶する苦しみを受けることになるかもしれません。われわれはある人たちが軽く考えているようにはこの問題を軽率に考えるわけにはゆきません。ある人が次のようにいうのを私は聞いたことがあります。「ある島で行なわれる核実験についてなぜ心配しなければならないのか。ずいぶん遠方ではないか」この人は世界中の大気が汚染されていて、本人が好むと好まないとにかかわらず本人もそれを吸わねばならないということに気づいていないのです。文明化していようがいまいが、ある島の人人がいったいなぜ実験地域の近くの家の上空をただよう放射能の致命的な量を浴びなければならないでしょう。

またこんなことをいう人もしばしばいます。「ああ、大丈夫だよ！　大気の状態がそんなにひどくなってきたころには、おれはこの世にはいないよ」自分の子孫たちに何が起こるかを考えられないほどに人間は無感覚になったのでしょうか。

あなたは一人間としてどうしますか。この記事のはじめに述べましたように、核実験反対の意味の個人的な手紙を全世界のあらゆる国の政府に送ることです。しかし暴力をふるってはいけません。静かな常識ある態度で行なうべきです。

こうした個人的な手紙が多数送られますと、それは署名運動よりもはるかに大きな力をもつことになります。かかる手紙類が充分に各国政府へ殺到したならば、政府の指導者はその力におされて実験反対のために団結するようになり、こんなふうにして団結した多数の小国は実験を行なう大国へ働きかけるでしょう。

そして世界の世論が充分に大きくなったならば大国は大衆の要求に屈しなければならなくなるでしょう。怪物は浮かれさわいでいます！　今こそ活動するべきときです！



編集後記

◎ 本号は記事が多いために二十五頁としました。これでも本誌としては"特大号"です。

◎ 本号中の"核実験は中止されねばならない"と題したアダムスキ氏の記事は、ハニー氏発行の"コズミック・サイエンス・ニューズレター"一九六二年十一月号から十二月号にかけて連載されたものです。

◎ ハニー氏の"現代の宗教の起源"は従来の宗教史をくつがえすような興味ある解説で、原文中には図版が豊富にかかげてあります。

◎ "自然力の活用"を書かれたT氏はアダムスキ氏の熱心な支持者であり、電気工学を専攻される若い研究家で、目下ある画期的な発明に打ち込んでおられます。本誌中の論文は一般の人にわかりやすく説かれた序説でして、他に多くの数式が加えてありましたが、都合により省略しました。

◎ 本誌中の記事の翻訳ものはすべて編者が訳したものです。ゆえに文責は編者にあります。各記事中のカッコ内の注は編者注の意味です。また"ブラザーズ"とあるのは、進化した他の遊星の住人という意味で、従来はよく宇宙人といわれていましたが、近来ロケットに乗る宇宙飛行士のことをジャーナリズムが宇宙人と称するところから混同するおそれがあるために、本誌ではだいたいに"ブラザーズ"といっています。これはア氏の文章などによく宇宙人のことを Space Brothers（宇宙の兄弟）としてあるので、それを略して"ブラザーズ"というわけです。この他に、英語では Space Men または Space People ともいいます。

◎ 本誌の旧号は次のものだけが少数在庫しています。一九六二年九月ー十月号、十一月ー十二月号（以上各送料共百円）次号は三月末に刊行の予定です。

◎ 編者はみずからタイプライターを操作して本誌の製版を自分の手で行なうことを望んでいます。その理由は、編集がきわめて容易なること、字や文章の誤りが少なくなること、経済的であることなどです。そのために和文タイプライターの入手計画をたてて購入資金をつのっておりますので、いかほどの額でも結構ですからご支援をたまわればさいわいと存じます。本誌の印刷費にもかなり無理をしておりますので、誌代未納分についても幾分のご配慮を願えればたすかります。

（久保田）

通巻第十四号

日本GAPニューズレター 1963 1月・2月号

編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP 島根県益田市益田古川 振替・松江二六三〇（久保田八郎個人名義）

印刷所 益田タイプ

昭和三十八年二月十日発行

頒価一〇〇円（送料共）